

## 夢・転生・フッサール現象学

渡辺恒夫 (Tsuneo Watanabe)  
(東邦大学)

### § 1 序論 夢の現象学の方法としてのフッサール現象学

フッサール現象学 (=超越論的現象学) 現象学的還元を方法の骨子とする。その他の現象学 (ヤスパーズ、シェーラー、ハイデガー、サルトル、メルローポンティ等) では、現象学的還元が見失われている。

フッサール現象学  
(広義の超越論的  
現象学)

(狭義の) 超越論的現象学 存在信憑 (世界・他者等) の根拠を解明する目的で現象学的還元による経験の構造の分析を行う。  
心理学的現象学 現象学的還元によって経験の構造を分析し、経験的心理学の基礎とする。超越論的現象学と目標が異なるのみ。  
経験的現象学 (現象学的心理学、現象学的精神医学、現象学的社会学、等) フッサール現象学を経験的研究に適用可能とするため、経験科学者によって発展させられている。

@超越論的方法の経験的心理学的方法への置き換え (cf. 渡辺、印刷中<sup>i</sup>)

- ・現象学的反省⇒体験記述事例テキストについての考察。
- ・エポケー⇒テキストの一人称的読み (体験を記述したテキストはすべて私自身の体験記述として読む)。
- ・本質観取⇒内的体験の構造図解法。

@夢研究へのフッサール現象学的方法のアプローチ

- ①夢は、現実世界と同等の存在権利を持った、「世界」である。
- ②夢を夢以外のもの (脳の状態、無意識的願望) によって説明も解釈もしない。
- ③夢世界と現実世界を区別する根拠は何かを、内的経験の構造の違いに求める (渡辺、2010<sup>ii</sup>)。
- ④デカルトのように「現実には夢ではないのか」と問うだけでなく、「夢も現実ではないのか」と問い、夢世界の中に、現実の名に値する世界を探し求める。⇒本研究の目標

### § 2 「インセプション」—— “他者の夢への侵入”の現象学的解明

映画「インセプション」では、他者の夢に侵入するという、やや陳腐なアイデアが基本となっている。

ここで指摘したいのは、他者の夢への侵入という発想の底に一般にあると思われる暗黙の世界観・人間観である。この世界観は、自分が、人間たちの構成する「類」の一員であるという、日常的自明性の世界を暗黙裡に前提している。そこでは、自分自身を含めた個々の人間が、箱が内部を備えるように「内面」を備えた身体とみなされるという、「箱型人間観」が形成されているのである (図 1)。

したがって、他者の夢への侵入とは、他の箱の内部への侵入ということになる。

けれども、いくら他者の身体の内面を、脳の内面を調べてみても、「内面」なるものが見つかるはずはない。そこで、そのような原理的に観察不可能な世界へ「侵入する」とはいかなることかを、まず問わなければならない。

唯一考えられるのは、侵入すべき他者（A）と侵入者である私（W）と

は、寸分違わぬ夢を見たのではないか、ということである。これを**同一仮説**と名づける。少しでも違えば、単に別々によく似た夢を見た、というだけの話になる。が、寸分違わなければ、両者を区別できなくなる。我々は、世界内の事物に関して、寸分違わぬ別個の2つを（空間的・時間的分離によって）観察可能であるが、夢は「世界」そのものであるため、外側から分離観察できない。

同一仮説のもと、（W）が他者（A）の夢へ侵入する場合（ $W \rightarrow A$ ）と、侵入される場合（ $W \leftarrow A$ ）に分けて考察しよう。

### 2-1 W→A（私が侵入する側という事態）

このとき、私は、Aの夢であることを自覚しながら、その夢の中でWとして振舞っていることになる（Aの夢であるという自覚が伴わなければ、Aの夢への侵入という意味が出て来なくなる）。

一方、Aの側から見れば（あるいはAの手による記録によれば）、夢であることを自覚しながら（この自覚の中にはAの夢であるという自覚が含まれている）、Wという人物として振舞っているという、**明晰夢を見ている**ことになる。二つの夢は同一なので、私の側からみても、夢であることを自覚しながら（この自覚の中にはAの夢であるという自覚が含まれている）、Wという人物として振舞っているという、**明晰夢を見ている**ことになる。

夢の超越論的現象学では、夢を夢以外の何かで説明してはならないという現象学的還元から出発するので、私の側から見てもAの側から見ても、この夢は、「Aが、Wになったという明晰夢を見ている」としか理解できない。このような構造の明晰夢は可能である。ハリリー・ポッターになって活躍しているが、夢であってハリリー・ポッターは別人であるという

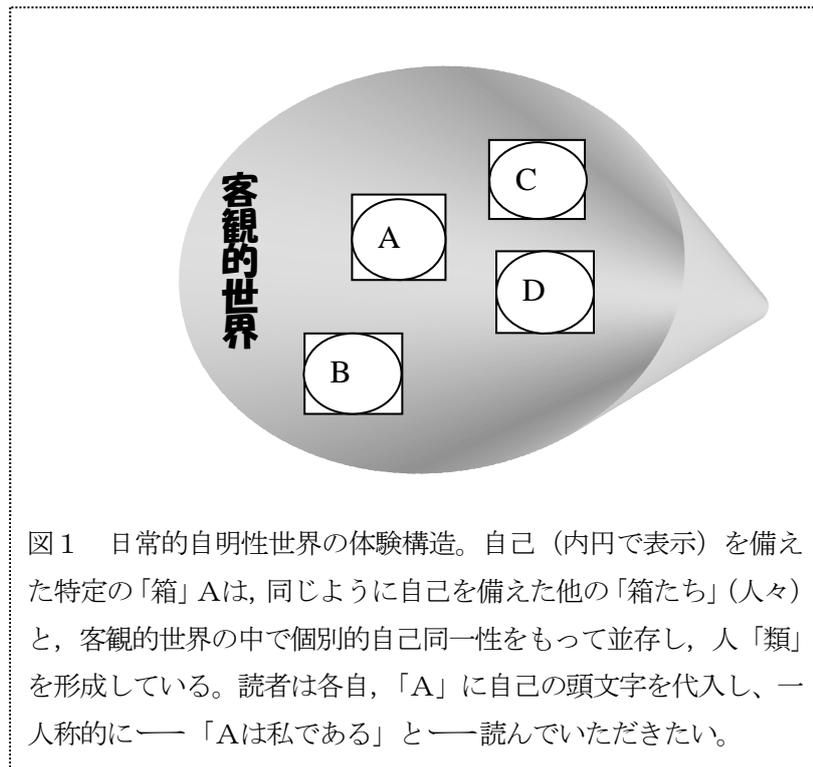


図1 日常的自明性世界の体験構造。自己（内円で表示）を備えた特定の「箱」Aは、同じように自己を備えた他の「箱たち」（人々）と、客観的世界の中で個別的自己同一性をもって並存し、人「類」を形成している。読者は各自、「A」に自己の頭文字を代入し、一人称的に——「Aは私である」と——読んでいただきたい。

自覚を維持した明晰夢がありうるように。

この夢は誰の夢だろうか。現象学的に還元された夢世界では、この夢の夢主はAなのである。つまり超越論的自我がAに位置しており、経験的自我がWなのである。

目覚めることによって、私は、超越論的自我と経験的自我が再び一致したことに気がつく。つまり、転生が起こったのである。Aに超越論的自我が位置する一つの世界から、Wに位置する別の世界へ転生したと、解することができるのである。

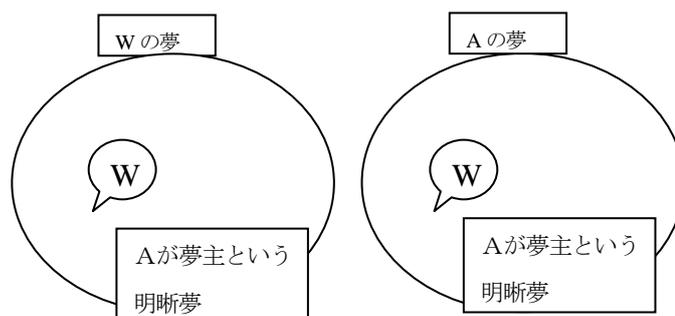


図2 W→A 同一仮説。尻尾付小円は夢中主人公格登場人物。

## 2-2 W←A (私が侵入される側という事態)

次に、私が侵入される方だとしよう。

このとき、私 (W) は、Wの夢の自覚を伴いつつ、Aになって勝手な振る舞いをしたという明晰夢を見ていることになる。しかしこれは、目覚めても、超越論的自我の交替を伴わない以上、転生とはいえない。

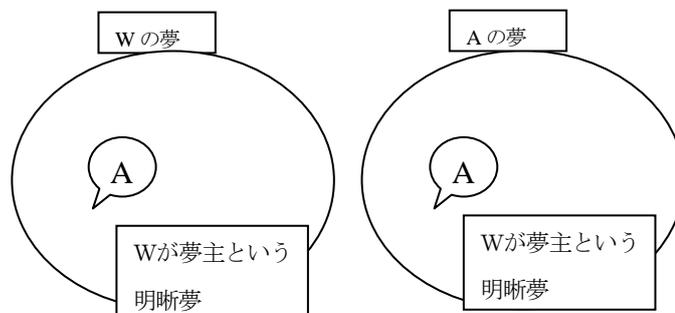


図3 W←A 同一仮説

この場合、目覚めて後、Aが実在すること、しかも、Aの、私の夢の中での振る舞いは実在のAの意図にもとづくことを知ったとする。このとき、私はAに憑依された、と言う。

## 2-3 「§2 インセプション」の結論

1. 私が夢を通して他者Aの夢に侵入するとは、他者Aに一時的に転生することを意味する。

2. 私が他者 A に夢を通して夢の中に侵入されるとは、他者 A に一時的に憑依されることを意味する。

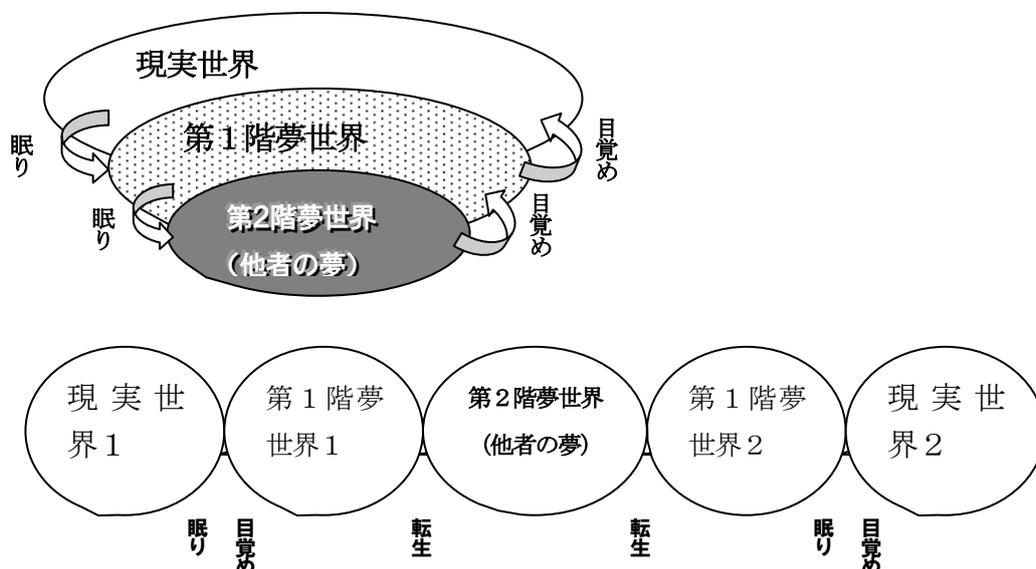
これが、超越論的現象学による（箱型人間観に依らない）インセプションの解釈である。

3. この解釈は、他者 A の「意識」をエポケー（括弧入れ）したままでも成立する。つまり、他者 A が哲学的ゾンビであろうとなかろうと、成立する。

### § 3 「インセプション」——夢の階層構造

インセプションでは、他者の夢に侵入するために、まず自分の夢の中で、「装置」に入って眠り、「他者の夢」に侵入するという、夢の階層構造がある。けれども、階層構造とは、対象を外側から見た表現である。夢を内側からのみ見る現象学的方法では、階層を上下するとは、単に一つの世界から他の世界へと、「眠り・目覚める」ことによって移行するだけのことである。

しかも、図のように、他者の夢への侵入とは、その他者へ「転生」することを意味する。



#### @問題

「現実世界 1」 = 「現実世界 2」、 「第1階夢世界 1」 = 「第1階夢世界 2」がどうしてわかるか。→この問題は、より一般に、夢から覚めた時、2つの記憶を、「夢」と「昨日の現実」へ振り分けるのはどのようにしてか、という問題として立てられる。答え：今、この瞬間の現実との記憶の連続性の多寡に応じて、「現実」と「夢」への振り分けがなされる。従って、ある記憶を「現実」と判断するには、記憶の連続性が重要であることが分かる。

### § 4 なぜか別人として生きている夢

§ 2 では、「誰か他人である A としての明晰夢を見るなら、A に転生した、と言える」という結論になった。それでは、明晰夢ではない普通の夢の場合であって、誰か別人として生きている夢ではどうだろうか。

実際の夢テキスト（ブログ「夢の現象学」）から、「なぜか他人として生きている夢」を取り上げ、これらの夢が、「転生」として理解可能であるか否かを考察する。

2011年2月18日（金）

夢の現象学（39）：夢の世界では別人として生きていたの巻

■別人として現実にはないアパートに住んでいた夢

2月18日（金）。夢を見た。アパートに住んでいた。古ぼけた畳敷きの部屋だった。隣との間は、薄い板壁一枚だけで、仕切られていた。

夢の中ではこのアパートは見慣れた場所だった（目が覚めて思い起こしても、過去の他の夢に何度か出てきたという気がする）。そして、夢の中では、私は別人だった。つまり、渡辺恒夫ではない人物だった。

突然、廊下に、大きな声がした。同時に、鍵をかけておいた筈の出入り口の引き戸が、ガラガラとひらいた。半分だけ開いた入り口から、大声の主が内部を瞥見して、また戸を閉めて、隣室の方へ行った気配がした。きっと、酔っ払ったかして、部屋を間違えたのだろう。それにしても、鍵が掛かっていたはずなのに力任せで開いてしまうとは物騒だ……この辺で、目が覚めた。

■夢の中で別人であるとは、一種の輪廻転生であるということではないか。

すでに書いたように、アパートの和室は、今まで何度か夢の中で、住まいとしていた場所だった（現実には見覚えがないが）。けれども、そこに住んでいた私自身が、渡辺恒夫ではない人間だった。それだけは、夢の中でも分かっていたし、目覚めてからも分かっていたことだった。

夢を、現実世界と存在論的に対等の地位を占める「世界」とみるとみなす、超越論的現象学の立場。夢世界の中で、私が「渡辺恒夫」以外の人間であったこと。この二つの論理的帰結として、私は、目覚めと共に、「他の誰か」から、「渡辺恒夫」へと、輪廻転生したといえるのではないだろうか。

2010年10月16日（土）

夢の現象学（32）：私を含めた飛翔人の出現で世界に壮大な何かが迫る予兆の巻

■飛翔人になった夢を見た。

姿かたちを鳥に変えて飛ぶのである。どういういきさつでこんな鳥人間になったかは、夢の最初の方が思い出せないので分からない。

とにかく、大空を自由自在に飛ばんものと、飛ぶ練習をしていたのだった。なぜなら、高層マンションのベランダからベランダへと飛んで行くのだが、飛び立つたびに、ひょっとして飛べなくなっていて落ちるのでは、という不安がよぎるからだった。

ある幹線道路沿いに内陸側へと飛んでいたときもそうだった。極めて高いマンションのベランダから飛んだときは特に勇気が要った。幸い、転落防止のネットが張ってあったので、エイヤッと飛び出し、ネットをバリンと破って飛翔を続けようとした。

そのとき、ネットにすでに破られた穴があるのが目に入った。どうやら、自分以外にも

飛翔人が居るらしい（「飛翔人」の語を意図的に作ったという記憶がこの辺にある）。こうしてなぜか突然飛べるようになったのは、世界でじぶんだけかと思っていたのだが。

なぜか不安になった。飛ぶ練習をもっと積まなければ、と思った。もう一羽の飛翔人は、ひょっとして私より巨大かもしれない、と思うと、怖くなった。だから、飛翔能力だけは鍛えておかなければ……。海鳥のように、潜る術も見につけなければ……。するとたちまち、道路沿いに海岸が広がった。私は海面から潜って翼をバタつかせて練習を続けた。そのうち波に吞まれて気を失ったらしい。気がつくやうに、岩場に打ち上げられていた。（「親切な誰かが見つけて拾い上げてくれた」、という夢語りナレーションがこの辺で入っていた。）まさか、本当は人間だと気づかれなかったでしょうね。

私は、ぬれた翼をバタつかせて、飛翔訓練に戻った。多少濡れていても飛べるのは有難かった。そんなことをやっているうちに、目が醒めた。大空を飛翔する感覚が、船酔いの感覚のように残っていた。10月16日（土）。朝8時半。

#### ■壮大な物語が夢世界に迫りつつある兆の巻

目が醒めてしまったのが残念だった。私のようになぜか鳥人間に変身する人間が徐々に増えたり、他の飛翔人に遭遇したりして、壮大な物語が幕を開ける予兆があったからだった。

加えて、この夢世界は、記憶による現実のコピーではなく、現実世界とは別の世界、夢の中にいる限りでのもう一つの現実であることに、気づかざるをえない。

何かが始まりそうな予兆をいっぱい孕んだ別の世界に、私は生きていたのだ。

しかもこの「世界」は、今朝の夢と共に新たに生成したのではなく、以前に夢の中で何度も生きたことのある、馴染みのある世界のような気がした。これからも、夢として何度か生きるかもしれない世界だ、ということが、なぜか直覚されたのだ。

いつか私は、この夢の続きをみるだろう。

2010年5月18日（火）

#### 夢の現象学（26）：夢の中で他の夢を現実のこととして想起するの巻

■夢の中で他の夢を想起するのは、夢は夢同士でつながりあって現実に匹敵する首尾一貫した世界を形成している証拠なのか？

5月16日。夢を見た。新宿から私鉄（東武らしい）に乗って関東北部の見知らぬ町に下りてさまよっていた。帰ろうとして、とある駅に着いた。しかし、行先表示を見ても、新宿の名はおろか、知っている駅名がない。反対側のホームに行っても同じことだった。これでは、以前と同じことになってしまう、と思った。

「以前」というのは、（これは目覚めてから思い返したことだが、）似たような、私鉄で帰ろうとして、行先表示に見知った駅名がないという経験を、以前、夢でしていたのだが、この夢では、現実の経験ということになっていたのだ。

そのうちに、この駅を通過する電車が、なぜかヨタヨタといった感じで、ホームに接しないレールを通過してゆくのが、ホーム同士をつなぐ連絡橋の上から見えた。駅を後にし、別の駅を探そうと町をさまよっていると、Mさんに会った。この前、九州から大学院集中

講義に来てくれた人だが、夢の中では、町の住民ということになっていた。新宿行きの路線を探していると言うと、「この辺は新宿は遠すぎる」という答え。つまり、東武鉄道はそれだけ速いので、新宿からは遠く離れた北関東の外れの方の支線に入り込んだかな、など一人で納得していた。「甘利まで行けば何とかなる」と M さんは言う、通りがかりのタクシーを呼び止めて、一緒に乗ってくれた。甘利とは、近くの大きな町らしい（目覚めて、最近話題の、国会で民主党女性議員を突き飛ばしたという嫌疑のかけられている自由民主党議員の名だ、と気がついた）。

周囲の景色はさびしい田園風景だ。途中、局地的にだけ霧雨になっているので、造園のためにスプリンクラーの大規模なのをやっているのかな、など M さんに尋ねた。「この辺の産業は何ですか」と、M さんにともタクシーの運転手にともつかず、話しかけた。「絵ですよ」という答えが運転手から返ってきた。「写生ですよ」と言ったのかもしれない。（このあたり、夢主として自分で返答をあらかじめ考えて、運転手の口から言わせている、といった感じだ）。そう言われれば、途中、車から、道端で写生をしている高校生らしき一団を見かけたのだった。そのうち目が醒めてしまった。

夢の中での想起について。夢の中では、他の夢を、現実のこととして想起することがある。これは、起きている時でもそうで、ひとつの夢を思い出すと、芋づる式に他の夢が次から次へと思い出されてくることもある。

脳科学的に説明すれば、夢の記憶は現実の記憶とはやや異なる脳の場所に、まとめて格納されているからだ、ということになるかもしれない。認知心理学的に説明すれば、夢記憶の想起様式には、現実記憶の想起様式とはやや違う共通の特徴があるからだ、ということになるかもしれない。

深層心理学的に言えば、複数の夢記憶は、共通の、けっして顕在的には全体を想起できない、夢世界の存在を指示しているかもしれない。ちょうど、イースター島などの太平洋の島々に残る文化や遺跡を、チャーチワードが、海面下に沈んだ広大なムー大陸の存在を指示する証拠とみなしたように。

現象学的に言えば、現実世界における（今日は昨日の続きと言う意味での）記憶の一貫性と、夢世界における記憶の（夢世界では続きは例外という意味での）非一貫性という、非対称性が成り立たないかもしれない、ということになるだろうか。夢世界でも、他の夢を、夢の中での現実の記憶（昨日の記憶）として参照できるのだから。

#### @ § 4 の結論。

事例 1 + 事例 2 + 事例 3 の特徴を備えた夢は、経験的に存在可能と思われる。そのような、夢の中で別人として生き、しかも、他の同様な過去の夢を現実として想起するような夢を（§ 3 の末尾で言及したように、「現実」という判断は記憶の連続性に基づいている故に）、「転生」と解することには、原理的に矛盾はない。それゆえ夢世界の中に、現実世界の名に値する世界（たとえば、その世界から現実世界へと私が別人として転生したと見なすことができる世界）を見出せるか否かは、経験的な問題となる。

## § 5 結論

超越論的現象学の方法に従う限り、

①夢の世界については、記憶が不完全である以上、現実らしさは程度問題となる。

②明晰夢は記憶がかなり鮮明なので、夢主=私と考えてもよい。

③夢主と夢中主人公が異なる場合でも、夢主=私である。

④通常の夢の場合、現実らしさを構成するのは記憶の連続性である。従って、別人として生きている夢に、十分な記憶の連続性があれば、転生であると経験的に解しうる。

なお、このような考察を、目覚めの世界で行うのは、夢世界にとっては不利となる。夢の中で同様な考察をしない限りフェアではない。——と、ここまで考えてきて、今、夢を見ていて、夢の中でこの考察をしているのかもしれないと、気がついた。このように、夢と現実の区別は、あくまで相対的である。

---

<sup>i</sup> 渡辺恒夫「自我体験研究への現象学的アプローチ」. *質的心理学研究 11*. 印刷中.

<sup>ii</sup> 渡辺恒夫『人はなぜ夢を見るのか』. 京都：化学同人, 2010.